

## 第10回定例委員会会議録

教 育 長 ) 開会宣言

教 育 長 ) 会議成立の宣言

教 育 長 ) 会議録署名委員の指名（上月委員）

教 育 長 ) それでは、審議に入ります。

はじめに、日程第1、専決報告第40号「丹波少年自然の家事務組合の解散及び同事務組合同規約の変更について」を議題とします。

提案説明を求めます。

青少年育成課長) <議案資料に基づき概略説明>

教 育 長 ) 説明が終わりました。質疑はございませんか。

極 楽 地 委 員 ) 他市町の議会でも同様の議決がされたと思うのですが、ほかの市町はスムーズに進んでいるのでしょうか。

青少年育成課長) 他市町の状況までは把握はできていない状況です。

極 楽 地 委 員 ) 芦屋市では議決もこれからですね。スムーズに進めばいいなと思います。

今後の利活用は、丹波市が地権者の方といろいろ調整された上で、ほかの市町にも使える施設にと市長が言われたとお聞きしたのですが、状況的には、それは変わらずでしょうか。

青少年育成課長) 令和6年度からは丹波市が今の事務組合から施設の譲渡を受けて、運営していく形になります。丹波市としては、これまで丹波少年自然の家として使ってきた経緯も踏まえて、利用方法等を判断されていくことになるかと聞いております。

極 楽 地 委 員 ) 芦屋市も使える施設になる可能性が高いということでは

うか。

青少年育成課長) 他市町も使えるような施設になればという要望は、幾つかの市町からは出ておりますが、丹波市がどうされるかは、今の時点ではまだ決まっております。

社会教育室長) 今後、譲渡後に施設管理に係る条例等の施行に関する手続きもあるかと思えます。働いていただく方の手配などもありますので、来年度以降になるかと推測します。

極楽地委員) それが気になっておりまして、御退職される方や、市町のほかの行政部署に行かれる方がいらっしゃるとお聞きしましたので、どういうスケジュール感で、使えるとしたら、どういうスパンでできるのかと気になっていましたので、今の御説明で理解いたしました。

森川委員) 丹波少年自然の家事務組合が解散して、その後、丹波市に譲渡されるということで、丹波市が運営されるということだと理解しておりますが、そうすると、本市が運営に何か意見をすることは、基本的にはできないという仕組みになってくるのでしょうか。

青少年育成課長) 芦屋市を含めて構成市町の関係は、そこで解消される形になります。

教 育 長 ) 他に質疑はございませんか。

無いようですので、これをもって質疑を打ち切ります。

これより採決いたします。

本案は、原案どおり承認することに御異議ございませんか。

〈異議なしの声〉

御異議なしと認めます。

よって本案は原案のとおり承認されました。

〈専決報告第40号採決。結果、承認（出席委員全員賛成）〉

教 育 長 ) 次 に、日 程 第 2、報 告 第 10 号「令 和 5 年 度 全 国 学 力 学 習 状 況 調 査 の 報 告 に つ い て」を 議 題 と し ま す。

提 案 説 明 を 求 め ま す。

学 校 教 育 課 長 ) 〈 議 案 資 料 に 基 づ き 概 略 説 明 〉

教 育 長 ) 説 明 が 終 わ り ま し た。質 疑 は ご ざ い ま せ ん か。

上 月 委 員 ) 「5 教 科 の 学 習 に 対 す る 子 ど も の 意 識 の 変 化」の と こ ろ で、英 語 の「勉 強 が 好 き、ど ち ら か と い う と 好 き」と 答 え た 子 ど も は、小 学 校 で 全 国 比 8.6 ポ イ ン ト、下 回 っ て い ま す。同 じ 質 問 で、中 学 校 は 全 国 比 3.4 ポ イ ン ト 上 回 っ て い る と い う 結 果 で す。「勉 強 が 好 き、ど ち ら か と い う と 好 き」と 答 え た 子 ど も が 全 国 に 比 べ て 8.6 ポ イ ン ト 全 国 平 均 よ り 下 回 っ て い る こ と は 大 き い と 思 い ま す。

質 問 事 項 68 番 の「学 校 の 授 業 や そ の た め の 学 習 以 外 で 日 常 的 に 英 語 を 使 う 機 会 が 十 分 に あ り ま し た か」と い う 質 問 に 対 す る 回 答 を 見 る と、小 学 校 で 英 語 に 触 れ る 機 会 は、小 学 校 で 9.8 ポ イ ン ト、中 学 校 で 12.2 ポ イ ン ト 全 国 平 均 よ り 高 い わ け で す。環 境 的 に は、日 常 的 に 英 語 に 触 れ る よ う な 機 会 は と て も 高 い の に、小 学 校 で は 英 語 の 勉 強 が 好 き と 答 え た 割 合 は、低 い。小 学 校 で は、中 学 校 の 授 業 を 見 に 行 っ た り、先 進 校 に 学 ん だ り、英 語 の 授 業 を 公 開 し て 専 門 家 の 指 導 を 受 け る な ど、積 極 的 に 授 業 改 善 を す べ き で は な い か と 思 い ま し た。

中 学 生 に な る と ス ピ ー チ や プ レ ゼ ン や リ ス ニ ン グ や、要 点 を 捉 え る 機 会 が 多 く あ る の で は な い か と 受 け 止 め ま し た。

今後中学校では、英語で問答したり、グループや個人で意見を述べ合うような学習を行っていったらよいということが、質問紙調査から見えてくると思います。

学校教育課長) 委員のおっしゃられるとおりにと思いますので、ALTの配置なども教育委員会で考えていけたらと思います。

河盛委員) ここで聞くことか分からないですが、英語のスピーキングが、全国平均よりは高いですが、今回みんな低かったと新聞にも載っていて、言われています。

私が聞いた範囲では、自分がしゃべったことを録音されていて、それを自分で聞いて、よかったら押してというシステムだったらしいですが、全く聞こえなかった、分からないけど、押したという生徒がいるんです。そのクラスで一番英語ができる子も零点だったという話があるのですが、今回のテストに関して、事前に教職員側がテストのようなことはされていたのですか。

学校教育課長) 今、おっしゃっていただいたように、とても複雑な操作に今回なっておりまして、例えばボタンを早く押さないと、回答時間がどんどん短くなるというトラブルがありました。担当も学校に出向きまして、説明会や操作方法の案内もしましたし、当日も指導主事が出向きまして、一緒に、教室には必ず2名体制で対応しました。

芦屋市で大きなトラブルといたしますか、実際にとれなかった生徒もいるのですが、その後、また再度受けたりもしましたので、おおむね、一定受けられたのかなと思っております。

森川委員) 基本的なところで申し訳ないですが、今回、分析された御

意見を書いておられるところは、これはどういう手順でまとめられたのでしょうか。

学校教育課長) 全国学力・学習状況調査の結果がこちらに届きまして、それについて担当が確認をしながら、クロス集計等させていただいて、さらに学校教育課の中で分析をしまして、提出をさせていただいている形です。

森川委員) 教育委員会の中でまとめられたということですか。

学校教育課長) そうです。

森川委員) 学校の教員の方は関わっていないのですか。

学校教育課長) はい。これは、単純に芦屋市内の全部の学校のものです。

森川委員) そういうことですね。

教育長) 何か分析したことは返ってこないのですか。

学校教育課長) 全国の調査の結果ですから、そういったものは出るかと思いますが、市独自のものは来てないと。

教育長) 分析はしてくれていないですね。

学校教育課長) そうです。平均点等は全部出ているのですが。

教育長) 高等学校では模擬テストをしたら、全体的な傾向と学校の状況を分析してくれます。

学校教育課長) 全国の結果も出て、実際、全国平均を下回っているところは芦屋市の課題でありますので、そういった部分は、問題のところでは同じような傾向が出ていたりします。

教育長) 国の分析と本市の分析と重ねてみたらいいと思うのですが。それはないのですね。

学校教育課長) 市独自でというものはないのですが、全国だったり、県も別で出していますので、そういったものも参考にしながら芦屋市

で作成しています。

教 育 長 ) 正答率は、全部できたら100%ですね。

学校教育課長) 正答率、そうです。

教 育 長 ) 英語の「話す」は全国で12.4%しかできていなかったということですか。

学校教育課長) これ、極めて良好と芦屋はなっているのですが、実は18%ができていない状況です。全国もこれぐらいの値だった。

教 育 長 ) 数字としては145といったらすごい数字ですが、現状として見たら。

学校教育課長) これはこれまでの、下の米印で書いているような評価の基準でさせていただいているので。

河 盛 委 員 ) これ、スピーキングはどうやって正答かどうか判定しているのか、AIか何かが判定するのですか。

学校教育課長) AIではなく、業者が来ていますので、録音をしたものをデータとして送られています。

河 盛 委 員 ) 人力でやっているんですか。

学校教育課長) テストも多分人力、ペーパーなので、同じようにやっているのではないかと考えております。

学校教育担当部長) 恐らくですが、MEXCBTといって文科省のシステムに連動するような録音機能になっていて、そこが、おそらくAIの中に基準があって、そこに合うところが正解不正解になっていると思いますが。もしかしたら音声が入ってなかったりすると、当然不正解になっているのではないかとと思います。でないと、莫大な量の採点になるので、それも短期間で。

河 盛 委 員 ) 声が小さいとか。

学校教育担当部長) 可能性あると思います。

上月委員) 今の御意見に関連して、8ページを見ると、英語は聞く・読む・書くと、この3つですが、「話す」はあったのですか。

学校教育課長) 「話す」もありました。これとは別の日に、9ページに「話す」があります。

上月委員) 分かりました。

教育長) 全国学力・学習状況調査の実施については、いろいろな御意見があります。正答率が全国で12.4%の問題の難易度はいかがと思う。

河盛委員) 普通、正答率がそんなに低かったら、問題自体が無効ですけど。大学や国家試験だったら、その問題はなしになるのが普通ですが。

教育長) 市民の方がこれを見たときに、この問題自身、これでいいのかと、今、河盛委員がおっしゃったものを私も感じます。

極楽地委員) 今お話をお聞きして思った感想ですが、芦屋の子どもたちは教科の学力は高いとずっと言われていて、そこはすごくすばらしいなど、学校だったり、地域や家庭の皆さんの教育の意識の高さが表れているのだなと思っています。

一方で自己肯定感だったり、あとは地域へ貢献したいという思いだったり、将来の夢という情緒的などのポイントが低いということは毎年の課題だと思っていまして。

なぜかなといつも思っていたのですが、自己肯定感について、まず自己肯定感が低いということは必ずしも駄目ではないという見方の分析や意見を最近拝見しまして。目標が高い、意識が高ければその分だけ到達点が高いので、自己肯定感が低くなる

ところ。1つの要因として、芦屋の子どもたちは、より高いところの意識がある子が多いのではないかと、客観的に最近は思っています。

家庭においても、もっと上を目指そうという声掛けをすることがあるので、そういう声掛けにプラスして褒めること、ポジティブなサポートもすごく大事だなと。なかなかバランスが難しく、私自身もいつも反省しています。

学校でも家庭でも、子どもたちの自己肯定感、多幸福感を伝えるための声掛けというところ、具体的には、小学校の低学年では「いいところみつけ」だったり、「ちくちく言葉」は駄目だよという話だったりとか、具体的なことを先生がクラスで広めていらっしゃって、今振り返ると、それがすごくよかったなと私は思っています。

小学校の高学年や中学校になっても、クラスの中だったり、家庭で子どもたちにポジティブな声掛けをするところをより周知することによって、目標は高くあっても、多幸福感がプラスされれば、もっとポイントは上がってくるのではないかと思いますので、その辺りを学校、家庭、地域で伸ばしていければいいかなと思います。

上月委員) 今の極楽地委員の自己肯定感を高めることですが、その件と、「困り事や不安があるときに、先生や学校にいる大人にいつでも相談できる、どちらかというと思う」「理解していないところについて分かるまで教えてくれる、どちらかというと思う」という質問の回答が、やや全国平均を下回っていますが、そこも関係してくるのではないかと思います。



地域、家庭が大事であると同時に、学校で先生が子どもたちを褒め、1人1人の子どものよいところを知って、授業を行わないと、自己肯定感は高まっていかない。いつも一斉授業を行って、教育内容、指導内容を教えていくだけでは、知識をつけるだけでは、自己肯定感は上がっていかない。ここが根本的に大きな課題であると思っています。

授業の中で、挑戦したり表現したりする中で、褒められたり認められたりして、自信や希望がもてるようになるのではないかと思います。そういう授業にしていかないといけないのではないかと思います。

私が山手小学校の校長のときに、全国学力・学習状況調査が始まったのですが、授業改善自体が目的だったのです。今はあまりそういうことも言われなくなっているのですが、授業改善を行うために調査をしているんだということを、どの学校も、私たちも意識していくべきではないかと思います。

1人1人の子どもの思いや考えを引き出していくような授業をしていくべきではないかと考えています。

極楽地委員) ICTのタブレット活用に関して、質問と感想です。  
16ページのICT機器の利用状況ですが、小学校5年生や中学校1、2年生のときに、授業で受けた黄色のパーセンテージがあると思うのですが、これに結構ばらつきがあり、週3日、ほぼ毎日、週1以上が多いと思うのですが、何人か月1回、月1回未満がいらっしゃるの、どういう理由でしょうか。

学校教育課長) 昨年度までのクラスもそうですし、5年生までで、それぞれの子どもの認識の違いが大きくあるのかなと。本当であ

れば、通常、同じように1組は1組で、同じような値が出るはずですが、そこで子どもたちがやってる、やってない、その差ぐらいかな。

基本、なるべく芦屋市の場合、結構活用率も別の調査では高いほうですので、こちらが月1回は本当なのかなというところは、ちょっと疑問に思っているところはあるのですが、この辺りはそのままのところを出しているのです、そこまでは詳しく分かっておりません。

極楽地委員) 子どもたちの認識で、精度がでて、ずれが出ているということですね。

学校教育課長) そういふところになると思います。

極楽地委員) 先生によって使う、使わないという差があれば、ちょっと困るかなと思ったのですが、承知いたしました。

森川委員) 質問調査が行われたと思うんですが、それは児童・生徒に対するものと学校に対するものもあるように伺ったのですが、文科省の分析調査結果によると、学校からの質問調査の結果をクロス集計した分析などもされていて、意見が述べられていたりするのですが、今回の報告書にそれはなかったようですが、そういった観点での分析等はされたのでしょうか。

学校教育課長) 現状、ここにある分でしかしていません。というのが、学校となると、それぞれの学校でしか分からない部分があったりしますので。学校の中で、かなり複雑になってくるので、これは単純に市の独自、市の頂いたデータで分析しています。

森川委員) 文科省のものと、ICT機器の使い方を学ぶ研修機会と授業におけるICT機器の活用頻度がクロス集計されていた

りしたのですが、そういったものはデータとしてある。

学校教育課長) データとしては、ある程度ございます。

森川委員) あと、今回の分析結果は、今後、授業の現場でも生かしていかれるような取組をされていかれると思うのですが、具体的にどういう形で教育現場、学校に説明していったりされる御予定なのか、その辺、ありましたら教えていただけたらと思います。

学校教育課長) この内容に関しては、今度9月の校長会で説明をさせていただいて、授業改善ということで進めていこうと思います。あと別で、各学校には結果が出ておりますので、各学校も、それぞれの学校の課題等を調べながら、授業改善を進める形で進めております。

森川委員) 分かりました。

極楽地委員) 先ほどのタブレットの活用ですが、以前から思っていることでして、家庭でも持ち帰ってくる子どもたちが多いと思うのですが、家庭でもやる子とやらない子に差があって、習い事や塾や、ほか遊びに行ったりで、家庭にいる時間が少ない子もいると、差はあると思うんです。

親としては、いい程度に使ってほしいなと思っては、声掛けはするのですが、なかなかうちの場合はタブレットよりも紙のほうがいい、頭に入ると言っていて。書いたり、ノートを取ったりというほうがいいと言っていて。子どもにもタブレットが合う合わないだったり、頭の入り方が違う、差があるのかなとは感じていました。

個別最適ではないですが、1人1人に合わせた学びが大事だ

など最近、常々思っているのですが、タブレットもうまく活用しながら、その子どもが伸びる勉強方法を子ども自身で気づき、身につけてほしいなと思います。大変だと思いますが、1人1人の子どもたちに対しての学びをサポートいただければありがたいと思います。よろしく願いいたします。

学校教育担当部長) 今ので、14ページを見ていただいたらいいのですが、先ほど森川委員もおっしゃったこととつながっていくのですが、ここが非常に改善の余地があるところだと思っていまして、組み立てとして。個別最適な部分、それぞれの特性ですとか理解度に応じた形、そのときの心の状況にも応じながらというところもありまして。

一番皆が幸せを感じてほしいですし、学校は楽しいと思っしてほしい。そういう中で、右下のグラフで、自分に合った授業と当てはまると、割とどんどん学校への愛好度が高いことが分かっていますので、この辺りをお示しすることは、学校でもしっかり職員と校長先生がリーダーシップを取って、話してほしい部分になります。

左側の上の部分、問題解決学習、やはり主体的に自分たちで解決していこうという授業に取り組んだほどというところがありますので。

こういう仕掛けが、いわゆる受け身な形の、教えられてばかりのところではなくて、自分たちでここを学びたいとか、こういうところを疑問に持っているんだというところを大事にした授業づくりが、右側の、人との関わりの中で、協働の中でと兼ね合いがあって、それが結局、他者を通して自分自身を認めて

いくところにもつながるところですので、自尊感情ともつながるところです。

こういった授業をしっかりと組み直していくというか、常に教師は反省しながら実践していくところがありますので、見直して見直して、もう1回、今日声を掛けて、改善が見られなかった子や声が聞けなかった子がどうだったかをしっかりとやっていくことが、先ほど上月委員もおっしゃっていた、先生が声を掛けてくれるみたいなどころともつながっていく部分です。

学習塾は、教科のところでは結構、かなり数値が高いのです。質問紙的にいくと19ページ、17番、19番辺りは割と高い数字です、小学校でいけば。ここは教科の中身の部分になるのですが、ただ、これでいくと授業の組立をしっかりと生活につなげたり、これがどう使われているんだという授業に変えていくことで、その教師の役割だとか仲間の役割が出てくるのかなと思っています。

それでいくと15番の、いわゆるWell-beingにつながっていくところで。さらに、これが本当、楽しい空間、学ぶことや遊ぶことが楽しい空間であってほしいと思っています。こういったところに踏み込んでいくよう校長会でもしっかり議論しておきたいと思っています。

河盛委員) 16ページに、タブレットの有効感と成長率がありますが、中学の数学は、「役に立たない」と答えた人が明らかに高いです。これについては、どういう分析をされていますでしょうか。

学校教育課長) それについては、教科の特性もあるのかなと思っています。例えば中学校の国語であれば、いろいろ調べるところで有

効だったりするのですが、やはり算数になると、なかなかそういった部分で使いづらかったりところで、ほかの部分とはいびつな形になっているのではないかと感じております。特に中学校は数学というところで、難しさはあるのではないか。算数だと、いろいろな調べることがあるのですが、そういう違いがあるのかなと思います。

河 盛 委 員 )        この分析は全国の生徒の分析。

学校教育課長)        これは芦屋市の生徒のみになります。

河 盛 委 員 )        分母が少ないために偏ったことはないですか。例えば「役に立たない」と言った人がたまたま、分母が少ないということがありますよね。

学校教育課長)        中学校の数学だと、もしかしたらあり得るかもしれませんが、結構、正答率が高かったりするのです。そこを確認させていただきます。

学校教育担当部長)    人にたずねたり、グループで解決したりするほうがいい。タブレットでどうこうするよりも、自分の力になっているという解釈をしている可能性もあるのかと思うのですが。逆に、個々の学習の仕方、学び方がどうであるかは、それぞれ学校で見ないといけない部分かと思います。

極 楽 地 委 員 )        対象の児童・生徒さんですが、大体小学校、中学校それぞれ50人ほど受けていらっしゃると思うのですが、この方たちは、学校に来づらい方たちが受けられていないということでしょうか。

学校教育課長)        それも含めて、単純に欠席も、病気ということもあり得るかと思います。

極楽地委員) たまたまその日にお休みだった、プラス、学校に来られていない方含めてですね。

学校教育課長) 4月で、まだコロナの時期ですので。

極楽地委員) 逆に、そういった受けられてないお子さんのこともちょっと気になりますので、引き続き学校でサポートよろしく願いいたします。

森川委員) 一つ新聞報道で、この学力テストの前に事前対策をしたりするところがあると見たのですが、芦屋ではそういうことはあるのでしょうか。

学校教育課長) ないです。

森川委員) 分かりました。

学校教育担当部長) これまでの学力調査におけるB問題などはすごくいい問題で、こういう問題が解けるようなとか、こういう組立てとか、教科を横断するような思考を誘うような授業を組まないといけないというのは、多分、問題を見たら理解されるはずで、いわゆる練習をするようなことはないですが、ただ日常的に考えさせるようなことは、させないといけない、教科を横断していかないといけないよということは、参考にはさせてもらっています。

上月委員) 引き戻すような感じで申し訳ないですが、私は国語の学力が年々落ちているのではないかと心配しています。

授業のあり方、方法を、先ほどから部長の説明にあったように、子ども一人一人が自分事の問題として捉えて、選択したり考えたり表現したりしながら課題を解決していき、その中で、必要な要点・要旨を読み取る力や構成、記述などの力をつけて

いく。そういう授業に切り替えないことには、国語は改善されていかないのではないか。

これだけ読書に向かう力も安定してきていて、社会教育も一緒になって頑張っているわけです。あとは、学校現場の授業改善しかない。そこを先生方をお願いしたいと思います。

河 盛 委 員 ) 例えばこのテストは外国籍の方も受けられているのですか。

学校教育課長) はい。ルビ打ちだったりをしながら、そういうものも事前に聞いた上で出ていただいています。

河 盛 委 員 ) 外国籍の方が多いと、国語などは下がることはないですか。

学校教育担当部長) その子の言語能力や理解力にもよりますが、可能性はあります。

河 盛 委 員 ) 芦屋市がどの程度かわかりませんが。

教 育 長 ) まとめるときに、課題があることばかり挙げるでしょう。芦屋の子はこんなにすごいぞと、何かの面があってもいいのかなと思います。これ自身が、自虐的な評価になってないかと思っています。

市民からは芦屋の子の学力が高いのは塾がやっているからだと言われることがある。ここに数値が出ているように、塾に行っているパーセントが他市に比べて高い。

以前はいいところも挙げてくれていたと思います。子どもたちにはいいところ探しをするように、教育委員会にしても、芦屋の子はこんなにいいところを、優れているよということを示せたらと思う。広報あしやで市民に報告するのでしょうか。

学校教育課長) QRで入ります。

教 育 長 ) それを見たときに、教育委員会は、悪いところばかり挙げ



ているのかと思う。グリーンのところは、いいところですね。

学校教育課長) はい。

教 育 長 ) 教育委員会としては点数もさることながら、子どもたちの思いは十分に受け止めて、これを6年生だから、次の5年生には関係ないではなくて、次の改善に生かしていくことで、引き続き、これには参加していくということで、いきましょうか。

他に質疑はございませんか。

無いようですので、これをもって質疑を打ち切ります。

それでは、報告第10号「令和5年度全国学力学習状況調査の報告について」の報告を受けたものといたします。

教 育 長 ) 続いて、報告第11号「Ashiya PEACEプロジェクトについて」を議題とします。

提案説明を求めます。

学校教育課長) 〈議案資料に基づき概略説明〉

教 育 長 ) 説明が終わりました。質疑はございませんか。

上 月 委 員 ) 質問ですが、5ページの下の方で、「ダイバーシティ」とは、多様性ということですね。それだけが英語になっているのですが、何かそこに意味はあるのでしょうか。

学校教育担当部長) ここは「多様性」という表現の仕方でもよかったのですが、「多様さに学ぶ」ことを表現したく、前も協議会するときでもお話しいただいたことですが、テーマを「多様性」としたときに、またその下に「多様性に学ぶ」となるので、このテーマとしては「ダイバーシティ」、割とこの言葉が一般化されつつありますので、そういう意味で、そのテーマとして、多様性に学ぶという表現にしたかったということです。

上月委員) 「対話」が中心にあるのですが、考え方として、例えば理科などで、発芽の条件か何かを考えると、こういう図をよく書くのですが、発芽の条件として考えられる「発芽」を真ん中に持ってきて、「日光」や「水」「温度」など、関係すると思われる条件を周りに置きます。その考えでいくと、対話が一番求めるものなのか、その対話に「ダイバーシティ」が関係してきて、「体験」が関係してきて、「働き方」も関係してきて、対話を育てたいんだと取ってしまうのですが、ここはWell-beingではないでしょうか。

学校教育担当部長) 全て対話を通して実現したいということです。

上月委員) そうしたら、緑色の輪が対話になるようなイメージだったら分かるような気がします。全てを貫いて結ぶのに対話は大事なのですが、対話が中央に来ることに、ちょっと違和感がありました。

学校教育担当部長) どのテーマ、内容でも対話を通して、「対話」を大事にしてくださいという意味合いです。

上月委員) これは、目指す子どもの姿が中央に来るわけではない、ということですか。

学校教育担当部長) はい。一番目指しているというか、そういう意味では「対話」を通して、いろいろなことに取り組むことが1つあるのですが、目指すところは、右上にサブテーマで書かせていただいています。夢中になって学ぶ、空間だったり、授業だったり、それぞれの学校が目指す姿です。もっと先は教育振興計画で示されているような、「未来を切り拓く」であったり、その先のラーニング・コンパスで言えば、「Well-being」に

なります。

このプロジェクトとしては、とにかく一步進めていくには、とにかく「対話」を常に念頭に置きながら、皆さんのそれぞれの活動の中に、意識として、「対話」を意識した上で、いろいろな活動に取り組んでほしいということです。それが先ほどの、一人ひとりに応じることもそうですし、多様性に応じていくこともそうですし、働き方もそうですし、授業研究もそうですし、そういう意味合いが、ここには込められています。

教 育 長 ) 上月委員は別に否定されているわけではないです。その表現の仕方です。対話が目的なのか、子どもたちの健全育成を図りたいのかとなったときに、我々は対話が根本的にベースにあって、そのことから子どもたちの育成があるでしょう。

内容をよく知っている人が見て取る理解と、あまりこれを知らなくて見る人の理解は異なる。誤解を招かない表現がいいなと思いました。

対話を上にぼんと、みこしの上に乗るのか、みこしの担ぎ手になるのかということでしょうかね。

部長としては、これは変更不可能な部分ですか。

学校教育担当部長) いろいろなものは、実はつながっている意味合いもあるのです。結局、どこの切り口でもいいですが、結局は何を目指してるか、何のためにやっているかが大事でして。それぞれがそこを意識した上で、双方で理解し合いながら、それこそ対話を重ねてという部分でいくと、立体的に表現できたら、また大分違うでしょうが、平面で表現するとしたら、実はみこしで言うと、支える部分だとも思っています。

「対話」が画面上で行くと、一番背面に設定しました。もっと言うと、これがあまり前に出過ぎずに、薄くてもいいのかなと思うのですが。でも、どこかでみんなが、そこは大事にしているという意味が込められたイメージです。

それでいくと、P E A C Eにつながるのですが、「安心」できる空間はすごく大事でして、それは何を起こすにしても、教員同士、教員の働き方もそうですし、幼稚園の、小さい頃からの体験もそうだし、みんなが安心して過ごせる。そこに、やっぱり対話があるところで。

いみじくもアドバイザーである 菅野先生が、「1 に対話、2 に対話、3、4 がなくて 5 に対話」と全国の学校をまわられて、そういう学校にしていけないといけないということもあって、目的というよりは、しみついていくといいますか、溶け込んでいく、そういう意味合いであります。

これは、全部をつなぎたかったです。幾つテーマがあっても、こういうふうにはすべきだろうなと思って。ここで初めて、子どもたちで言えば挑戦につながっていく。教師もある意味、挑戦なのですが、いろいろなことで人に認められたり、理解されることでやってみようみたいな。私なども、もしかしたら、これを打ち出しているのは、そういうことかもしれないです。そういう意味合いが込められていて。

濃淡で示す方法しか、今は浮かばないです。円で示したいのは円で示したかったのですが。

河盛委員 ) P E A C E プロジェクト、5 つ書いてあるのに、6 つあるわけです。そこが合わないような気もするのですが、いかがな

ものでしょうか。最初に P E A C E で 5 つ挙げているのですが、6 つなんです。どれかを統合したほうが、上と合うような気はするのですが。名称と考えると。

実際、「居場所」と「探究」と、この辺までは同じですが、途中から、ちょっとどうなんだと。「居場所」「探究」「個別最適な学び」になっているのに、ここでは「探究」の中に「個別最適な学び」が入ってしまっている。最初の 5 ページの上の図と下の図が合わないような気がするのですが。

学校教育担当部長) P E A C E のアルファベットの文字数と、居場所、探究で、そもそも P E A C E が先に来たわけではなくて、何を大事にするかということで、やっぱり「安心できる居場所」が、まず出てきた。あと、それにはどんな方法があるかということで、授業とかが出てきます。

そういう意味では、主体・協働みたいなところの「子どもの声を大事に」するところが、もしかしたら「居場所」ともつながるし、「探究」ともつながるところですが、ここが唯一、P E A C E の文字数で捉えると、少しはみ出た部分と言うとあれですが、主体の部分、声に耳を傾けることを大事にということとは、どうしても伝えなかった部分です。

そういう意味では、「協働」のコラボレーションの中に含まれていると言うとそこまでですが、ただ、どうしてもそこに「主体」が入ってこなかったのです。そういうところはあるのですが、耳を傾けてほしいということであえて分けたということとです。

そもそもの学校教育改革推進室の認識として、働き方も 1 つ

大事な視点でもありましたので、P E A C Eの中に、P E A C E自体、教師の安心が子どもの安心、子どもの安心が教師の安心、両方兼ね合ったところもございまして、働き方が、このP E A C Eの中には1つ1つには含まれていないですが、P E A C E全体には含まれている形になるわけですが。

どうしても、市教委から「あれしなさい、これしなさい」みたいになってしまって、教師側のきちっとした改善を、抱え込んではいけないし、整理すべき業務は整理しないといけないしということも大事、校内でも対話は重ねていただきたいという部分もあって。

P E A C Eという5文字に込められたのが、働き方もその1つという解釈です。それ、PとかEとかではないです。そういう意味では、P E A C Eに全部含まれてしまうところがございいます。

実は、学校運営協議会や、そういうものも入れたかったのですが、そうすると、またまとまりにくくなってしまうなというものがありまして、あえて今回はバージョン1です。これが、どんどん広がるといいし、学校でももちろん増やしてほしいと思っていますし、クラスで、学年で、あるいは子ども個人でというものもありかなというアドバイスは連携協定を締結した鈴木寛先生からは頂きました。

上月委員) 子どもの居場所、子どもが探究する、子どもの多様性に応じる、子どもの体験に、子どもの協働性、子どもの主体性を大事にする、それらは子どものあるいは、子どもに対する視点です。一方、働き方は、教師の立場です。ちょっとそこは違うん

ですが、市長もそこを切り口の1つにされているので、入っているのかと思うのですが。

先ほどの部長の説明で、対話を意識して、重視して取り組んでほしいという思いは、私もよく分かります。ここの中央は、目指す子どもの姿が入ってきて、その切り口として居場所があって、探究があって、ダイバーシティがあると捉えてしまうので。どんな子どもを目指したらいいのかという辺りが中央に来て、その周りのグリーンの輪が対話で、下支えすると考えます。

全ての居場所にも対話は要るし、探究の切り口にも対話が重要です。全て対話というコミュニケーションがありますが、中央はWell-beingではないかと言っているのは、そういう意味です。夢中力と言っている人もいましたが。先ほどの全国学力・学習状況調査で見えてきたような課題を、ここで解決していくという意識が見えるのではないのでしょうか。Well-beingとしたときに。

質問紙の中にも15番で、「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることがよくある、ときどきある」と聞いています。幸せの中身はいろいろありますが、そのことを含んでの質問ではないかなと思います。

このキーワードがどこかに出てくると、分かりやすい図を書かれたことの意味が出てくると思います。今までこういう図を書いたものを見たことがないので、一目で分かる取組になればよいと思っています。

学校教育担当部長)

今ので、みどりの帯に「対話」と、何個入るか分かりませんが、「対話」を入れ、真ん中にWell-beingですね。

教育部長) 見たときの理解は大事だと思うのですが、基本的に目指す子どもの姿は計画に載せているもので「夢と志をもって、自らの未来を切り拓く子ども」の姿はそこです。これは、その中のP E A C Eプロジェクトという1つの取り組みで、この「対話」は、私たち、つくった職員側から言わせていただくと、こだわりたい部分ではあります。ここが、やっぱり大事だろうと。

一番見てほしいキーワードが、もちろん育てたい子どもの姿は大前提なので、それも計画に入れていますが、このプロジェクトを立ち上げて、それで大事にしたいものは何かと言われると対話なので、説明は要るのかもしれませんが、ここは、変えたくないと思っているところです。

ここはあくまでも目的ではなくて、大事にしたいところの全部について、苫野先生のアドバイスもいただいているのですが、一番にスポットを当てて、取り組んでいきたいという思いだけ、追加で説明させていただきます。

上月委員) 私の考えですが、対話は1つの切り口だと思います。だから、その切り口を中央に持ってくるとちょっと分かりにくいと思いました。

学校教育担当部長) 補足させていただくと、5ページ、さっき河盛委員に言われた部分で、上と下で分かれています。実際、このプロジェクト自体が目指してる方向は、間違いなく2030年、2040年、Well-beingを目指しています。それを具体化したのが下の部分で、訂正させていただいたのは、この大きい部分になります。

その中で、目指してることはそこで、今、教育部長もお話し



させていただきましたが、どうしてもここが力の入れどころみたいなどころもあって、切り口というお話もあったわけですが、一番どこに力点を入れるにしても、まず「対話」を大事にしてほしいということで、それを中心に据えた形で、繰り返しになりますが、それぞれで互いを認め合ってみたいなどころでやってほしい、目指してほしいところです。

教 育 長 ) 対話は基本ベースとして中心に据えたらいいと思います。具体的な事例をいっぱい書いていますが、学校の中で、職員が対話して考えてくれることが大事だと思います。

これだけだったら、最初からこれをしろとなってしまうかと思いますが。

極 楽 地 委 員 ) P E A C E プロジェクトは、初めてお伺いしてから、私はすごくワクワク感といいますか、正直なところ、今までこういったキャッチーなプレゼン資料みたいなものは、他市含めて、教育委員会であまり見たことがなかったので、すごくチャレンジだなと、前向きな思いが伝わってきて、楽しみにしています。

先ほど、学校教育担当部長が第1弾とおっしゃっていたので、要はチャレンジしてみないと次のステップに進まないなので、私は、逆に初めから100%完璧なものを出すのではなくて、まずは一步、ワンステップを大事にされていますが、一步一步進むことが一番教育の現場で、私は大切だなと思っています。

行政以外も普通、ほかの民間でも、まずはやってみようという意識で動いてますので、失敗してもいいから、何かやってみようというところ。教育委員会が変わろうとして、その姿勢がすごく伝わってきていまして、それは多分、伝わる人が1人で

もいればいいのかと私は思うので、まずは自信を持って進めていただきたいなと思います。

あと、学校教育担当部長が言われていました、この対話は私も大事だと思っていて、市長がずっと言われていますし、以前から教育委員会や各地域や学校でも、対話を芦屋市は重視されてきていますので、それを今からやるのではなくて、昔からやってきたことを、改めて可視化できるツールとして、どんどん使っていただきたいなと思います。

周知が一番弱いところでもあったと思うので。それが、本当に周知をされようとしているところは、とても素晴らしいことだなと思っています。頑張ってくださいと思います。

上月委員) 以前の勤務校で研究のテーマが「対話力の育成」でした。対話力について、具体的に1年生はどういう力をつけていったらいいのか、2年生はどうなのかを、先生たちと学習指導要領など資料を基に話し合っただけでまとめたことがあります。

それと同じように、もし対話を中央に据えるのならば、やはり枠組みが要る。こちらは持つておかないといけないのではないかと思います。対話にもいろいろな層があると思うので、そこは考えていく必要があるのではないかと思います。

なぜ対話を重視するのかという思いが伝わるようにしていただければよいのではないかと思います。それが子どものWell-beingにつながるのではないのでしょうか。

教育長) 市長が対話を言われたから教育委員会が対話をメインにしたということではなくて、苫野一徳先生を、3月の時点から、芦屋の教育の考え方の柱を共に考えていただくところで、対話

が現れてきたということです。

市長が対話と言っているから、教育委員会も対話と言っていると市民の誤解を招いてはいけません。

最初から完璧にすることはできないが、素朴に教育委員から出された疑問点は、きちっと答えられるように準備をしていきましょう。

他に質疑はございませんか。

無いようですので、これをもって質疑を打ち切ります。

それでは、報告第11号「Ashiya PEACEプロジェクトについて」の報告を受けたものといたします。

教 育 長 ) 続いて、報告第12号「令和5年度の公民館講座等の事業について」を議題とします。

提案説明を求めます。

公 民 館 長 ) <議案資料に基づき概略説明>

教 育 長 ) 説明が終わりました。質疑はございませんか。

極 楽 地 委 員 ) 昨年度も御質問があったと思うのですが、すごくたくさん魅力的な講座もあって、聞きたいなと思いながら、なかなか平日なので行けないなというものも多いですが、以前もアーカイブ配信で、後で、オンデマンドで見られるような取組はどうでしょうかと質問があったと思うのですが、その後、特に進捗はございますでしょうか。

公 民 館 長 ) 事業委託している河内厚郎事務所と協議しているところで、なかなか難しいところもあり、やり方をいろいろ考えている最中でございます。

極 楽 地 委 員 ) できたら聞きたい講座もたくさんありますので、有料でも

聞きたい人はいるのではないかというお話があったので、ぜひとも御検討のほうを、よろしく願いいたします。

教 育 長 ) 河内厚郎事務所が、講師の手配など、全部をやってくれているのですね。

公 民 館 長 ) 手配していただいています。

教 育 長 ) 予算の中でやってくれているのですね。

公 民 館 長 ) はい。

教 育 長 ) 人が集まらなかったら、寂しいし、何か申し訳ない思いが出ます。どうしたらいいか分かりませんが。ただ単にニーズがないからと言うのは、失礼過ぎると思います。

上 月 委 員 ) 夏休み子ども教室の中の「折り紙建築」に挑戦しようという講座は、応募は多かったようですが、「折り紙建築」とはどのような内容でしょうか。

公 民 館 長 ) たった1枚の紙で、カッターで切って折るだけで、みんなの知っている建築物になります。素敵なポップアップカードを作りましょうということで、建築物を立体的に再現する切り紙の一種だということです。

上 月 委 員 ) ありがとうございます。

極 楽 地 委 員 ) 6ページの14番、セミナー及び講演会の家庭教育セミナーで、PTAさんが主催されるものだと思います。「あしやのきゅうしょく」をルナ・ホールで上映されるとお聞きしまして、ぜひ行きたいと思うのですが、1月5日はお正月明けた平日の金曜日でやっぱり土日は難しかったのでしょうか。

公 民 館 長 ) 既に土日の施設予約が埋まっていたため、金曜日になりました。

極楽地委員) 5日なので、お仕事を持たれている方は初出の方も多いか  
なと思うのですが。たくさんの方が来ていただけたらいいなと  
思っています。よろしくお願いします。

教育長) 時間は何時からですか。

公民館長) 時間は今把握できていません。

教育長) これは無料ですか、それとも有料ですか。

公民館長) 無料だと思います。

森川委員) 講演などは現地に行ってお聞きするという形態でしょうか。  
オンライン配信などで行われたりということはあるのでしょうか。

公民館長) 現地に来ていただく形で、オンライン形式は今のところや  
っておりません。PTAとの共催で、昨年までは試みとしてい  
ろいろやっていました。

教育長) 他に質疑はございませんか。

無いようですので、これをもって質疑を打ち切ります。

それでは、報告第12号「令和5年度の公民館講座等の事業  
について」の報告を受けたものといたします。

教育長) 閉会宣言